ナイトランの想い出（1980.11.1.東林～城ヶ島）

1年　副島昌二

このナイトランからまだ三ヶ月位しかたたないというのに、私のパーアッタ頭はもうかなりのことを忘れてしまっているので、フィクションがかなり含まれることをお断りしておきます。しかし、今頃になって新歓コンパや新歓ランのことを書いている人はたいへんですな。

ということでそろそろ本題にはいりたいと思います。おう、そこのお兄いさん！居眠りしてちゃダメですよ！しっかり読んでくださいよ！オンチャッタ。前置きがだいぶ長くなりましたので、そろそろ継私の文章を終わらせていただきます。…じゃなかった、今度こそ本当に本題にはいりたいと思いますが、いかがなもんでしょうか？

病気にはおよそ縁のなさそうな野中や兵藤（たしかこの二人はOL&ラリーの時もヤゼでオッコチしたんじゃないかな？）など次々にカゼの前にひれ伏し、一年の参加者は疲れを知らぬバカカマン下と私の二人だけとなって、恐ろしい二年生に

食べられてしまいましたとさ……(イヤー、JOKEですよJOKE。)そのうえ吉田さんがキャリンコを盗まれるという回暗刻単騎が、いや必殺技が襲いかかってきたのでした。しかし、それにもめげず、顔にひきつった笑みを浮かべ、記念写真をとって部屋をあとにしたのでした。

はじめは冷えきっていた体も、昼間からは考えられない程車の少ない中原街道を走っているうちに暖まってきた。しかし、多摩川を渡ってしばらくすると、アップダウンがきつくなり、もはや暖かいという段階を通りすぎて顔がゆがんでくる。だが、歩こう会の参加者が見えてくると、顔には余裕の笑みが浮かんできて、足は軽く坂を登ってゆくのでした。国道一号にはいるとさすがに車が増えて、少々ペースダウン。このころ歩こう会に参加している[redacted]小川さんたちの一行に出会った。この時はまだ元気そうだったがその後どうなったかは定かではない。桜木町の駅で一回目の休息。ここはしょーもない駅で自動販売機もない。というわけで寒さをこらえてタバコを吸ううちに再び出発とあいなったので

した。このあと途中の深夜営業の食堂でのこと。

僕：チャーハンありますか？

店のおばさん：ちょっとできないねェー

B：（チェッ、しょうがないな）カレーありますか？

O：できないんですがねー。

B：（クソッ、できんもんをメニューに書くな！）ヤキソバありますか？

O：できないんですよ。

B：（数秒考えてから獣化を訴えるように）じゃラーメン！

O：ハイヨ！ラーメンいっちょ。

というわけでまずいラーメンを流し込み出発する。この後は見通し距離内に車が一台も見えない（ちょっと不安という事も）という状態で、例のとうり（？）ロードレースがはじまったのでした。時間があるというわけで、遠まわりして行くことになり、街灯もない田舎道へとはいり込んでゆく。こういう真暗な道では道の外側に何があるのか全くわからない「断崖になってて落ちたらこわいなー」とか想像しつつ走っているとスリルがあっておもしろいもの でした。そういう頃、突然後ろから近づいてきた車のアンチャンが車をとめて一言。「てめえら何だと思ってやがる。ダンゴになって走りやがって、まっすぐ走れ。」と

言いのこして去っていった。我々は、「クソー車から降りてくれればこっちの勝ちなんだけどな～」と思いつつ、なおも真暗な道を走っていった。すると、ついに城ヶ島大橋が見えてきた。橋から下を見ると目まいがするという人はすぐにいやくて、全員無事に城ヶ島についたのでした。しばらく寒さをこらえて待っていると、待望の日の出を見ることができた。この後、紅茶を飲んでお昼しようとする頃には、寒さと空腹のためにカラータイマーが点滅していた。ここから三崎口駅までけっこうたすら、「こどもがバス」(この表現は、疲労が多用する)もれして、ただりついたのでありました。

〔エピローグ〕

僕たちが電車の中でいわしをしゃぶりながら帰っている時に、四人の極人は鎌倉目ざして走っていたのです。しかし、上には上のバカがいて、村瀬さんと下は、なんと東京まで走って帰ったそうである。

これで私の文章をすべて終わらせていただきます。最後までおつき合いいただきありがとうございました。ありがとうございました。また、お越しをお待ちしております。---ナンのこっちゃ。